

ISSN 2434-0138

2023年12月24日発行

GENSEI-SEIBUTSU

# 原生生物

第6巻 第2号 (2023)

日本原生生物学会  
*Japan Society of Protistology*  
<http://protistology.jp>

目次

追悼 重中 義信 先生

洲崎 敏伸 (神戸大学) ..... 1

第56回日本原生生物学会大会・第82回日本寄生虫学会東日本支部大会・  
第74回日本衛生動物学会東日本支部大会 合同大会 (PPEZ-2023) のご報告

永宗 喜三郎 (国立感染症研究所) ..... 2

学会賞 受賞者コメント

杉浦 真由美 (奈良女子大学) ..... 4

BPA 受賞者コメント

越後谷 駿 (北海道大学), 掛川 陽平 (日本大学) ..... 5

月井雄二記念国際交流基金から支援を受けた若手研究者の学会参加報告

島田 雄斗 (自然科学研究機構), 千原 あかね (自然科学研究機構),  
梁瀬 隆二 (Oxford Brookes University) ..... 6

若手の会 通信 ..... 8

事務局からのお知らせ

庶務 福田 康弘 (東北大学) ・庶務補佐 杉浦 真由美 (奈良女子大学) ..... 10

編集委員会からのお知らせ

「原生生物」担当 矢吹 彬憲 (海洋研究開発機構) ..... 10

## 追悼 重中 義信 先生

洲崎 敏伸 (神戸大学)

本学会の名誉会員の重中 義信 先生は、2023 年 11 月 10 日の朝、広島市のご自宅で、奥様やご家族が見守られる中、静かに息を引き取られました。享年 91 歳でした。

重中 先生は、1932 年 10 月 20 日に山口県でご誕生になり、山口県立柳井高校を卒業後、1955 年に広島大学に入学されました。広島大学では、理学部動物学教室の故 柳生 亮三 先生（本学会名誉会員）に師事され 1961 年に学位を取得されました。学位論文のテーマは、織毛虫の細胞内繊維系についての透過型電子顕微鏡による研究でした。この研究は世界的に高く評価され、その後約 10 年間、アメリカ合衆国とカナダに留学され更に研鑽を積まれました。1972 年には広島大学教養部（後に総合科学部に改組）に着任され、1996 年に定年にてご退職されるまで、一貫して原生生物を材料としたミクロの世界の探求に没頭される傍ら、後進の指導にも精力を注がれました。ご退職後は広島大学名

誉教授として、ごく最近まで様々にご活躍でした。本学会には 1972 年に入会され、長年評議員を務められました。また、2002 年よりは名誉会員とされました。

本学会には、十指に余るほどの重中 先生の弟子や孫弟子がいらっしゃいます。私も広島大学に在学中に、重中 先生の講義を受講し、その一環として見せていただいた電子顕微鏡の中に広がる広大なミクロの世界に魅了されたことが、原生生物学を志すきっかけとなりました。重中 先生の温厚なお人柄と真摯な研究姿勢は、多くの皆様の心の中に記憶され続けることでしょう。

私個人として、生前の重中 先生にお目にかかった最後は 8 月末のことですが、「身体を大切にくださいね」と何度も繰り返して伝えてくださった先生の暖かさをいつも思い出しています。

心よりご冥福をお祈りいたします。

合掌



在りし日の重中 義信 先生  
(2001 年 11 月 16 日 撮影)

## 第56回日本原生生物学会大会・第82回日本寄生虫学会東日本支部大会・ 第74回日本衛生動物学会東日本支部大会 合同大会 (PPEZ-2023) のご報告 大会長 永宗 喜三郎 (国立感染症研究所)

本学会第56回大会は、第82回日本寄生虫学会東日本支部大会および第73回日本衛生動物学会東日本支部大会との合同大会 (Protistology-Parasitology-Entomology-Zoology Joint Conference, PPEZ-2023) として2023年10月20日から22日まで、東京都新宿区の戸山サンライズおよび国立感染症研究所戸山庁舎で開催されました。3学会から合計143名(オンラインのみの参加8名を含む)の方々にご参加頂き、口頭発表40題、ポスター発表14題、受賞者講演1題、シンポジウム5題の発表が行われました。ポスト・コロナを見据えたオンラインおよびオンラインによるハイブリッド開催でしたが、ほとんどの方に現地での対面参加を選んでいただいたことで、素晴らしい発表と活発な討論が行われました(写真1-3)。また今回は第52回水戸大会以来の懇親会も復活し、懐かしい再会と新しい出会いも多々あったようです。このように無事に大会を終えることができましたのも、ご参加、ご協力下さったみなさま方のご協力の賜です。改めて深くお礼申し上げます。

2023年5月に新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が感染症法における5類感染症へと移行し、早々に対面を含めたハイブリッド開催と懇親会の復活を計画致しましたが、それ以降東京都における新型コロナウイルス感染者数は増加の一途を辿り、9月には2022年12月のいわゆる第8波のピークに匹敵すると思われるほどのレベルに達し、特に懇親会の開催について難しい判断を迫られる状況でした。週に一度更新される感染者数に関する情報を見守っていましたが、幸いにも懇親会をキャンセルできるギリギリ最後のタイミングで感染者数は横ばいとなり、開催を決断した後に少しずつ減少に転じ、安堵したことも今となっては懐かしく思い出されます。来年こそは何の心配もなく心ゆくまで議論を深め、交流を重ねることができる大会、そして懇親会となることを祈念致します。

今大会では、(1)各学会の本流から近くて遠い、(2)できれば複数の学会の内容に関係ある、(3)できるだけ若い人、という基準を元に5題の特別講演を

企画し、東京大学の澤井先生、農研機構の黄川田先生、理研の入谷先生、東京大学の岩滝先生、農研機構の荻原先生にご講演いただきました(講演順)。さらに、原生生物学会賞を受賞された奈良女子大学の杉浦会員(写真4)には「繊毛虫ブレファリズマにおける有性生殖の分子機構の研究」と題した受賞記念講演をお願いしました。私個人としてはどの講演も大変刺激的で大満足でしたが、みなさま、ご堪能いただけましたでしょうか。また、原生生物学会若手の会からは、自らの研究材料とする原生生物の、若手の会メンバーによる愛情たっぷりの紹介と、実際に直接顕微鏡で観察しながら議論することのできる観察会を開催いただきました。特に今回は、普段自由生活性の原生生物を見たことのない参加者も多く、大会最初のイベントとしてとても効果的な企画になったと思います。改めて若手の会のみなさんに感謝致します。

大会の最終日にはベストプレゼンテーション賞(BPA)が発表され、越後谷 駿 会員(北海道大学大学院)「細胞周囲の幾何形状に応じた繊毛虫ラップラムシの固着場所選択行動」(写真5)、掛川 陽平 会員(日本大学文理学部)「繊毛虫テトラヒメナの配偶核形成に関わるヌクレオポリンの探索」(写真6)、仲川 幹映 氏(明治大学農学部)「日本におけるイエバエの殺虫剤抵抗性遺伝子分布」の3名に授与されました。合同大会でしたので3学会からの選考となりましたが、原生生物学会からは越後谷 会員と掛川 会員のお二人が受賞となりました。仲川 氏は衛生動物学会東日本支部からの参加でした。受賞演題はどれも大変レベルが高く、個人的には納得の受賞でした。

最後に、開催の準備段階から会長を始め各種委員の方々にはたいへんお世話になりました。特に庶務の福田 先生には様々なご助言や手配をして頂き大変感謝しております。次回大会は、堀 学 副会長の主催で山口市での開催となります。新型コロナを気にかけることなく開催でき、そしてさらに盛会となることを祈念致しております。



写真1. 若手の会による観察会の様子



写真2. 発表の様子



写真3. 白熱する議論の様子



写真 4, 原生生物学会賞を受賞された奈良女子大学  
杉浦 真由美 会員 (左) と園部 会長 (右)



写真 5. BPA を受賞された越後谷 駿 会員 (左) と加藤 大智  
日本衛生動物学会東日本支部長 (右)



写真 6. BPA を受賞された掛川 洋平  
会員 (左) と加藤 大智 日本衛生動物  
学会東日本支部長 (右)

## 2023 年度 学会賞 受賞者コメント

杉浦 真由美 (奈良女子大学)

## 織毛虫ブレファリズムにおける有性生殖の分子機構の研究

この度は、「織毛虫ブレファリズムにおける有性生殖の分子機構の研究」という題目で名誉ある日本原生物学会賞を頂戴し、誠に光栄に存じます。学生の頃から長きにわたりご指導、ご支援くださいました先生方、ご推薦くださいました法政大学の廣野 雅文 先生、学会関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

私がこのような賞を頂戴できたのも、学部 4 回生のときに奈良女子大学の春本 晃江 先生とブレファリズムに出会い、1970 年以前からの三宅 章雄 先生による膨大なブレファリズムの接合研究に触れる機会を得ることができたお陰であり、深く感謝いたします。漠然と分子レベルの研究をしてみたいと思っていた学生の頃の私は、研究室配属の時に研究室をひとつに絞れず、悩んだ末に 5 人の先生の中から「あみだくじ」で決めるという何とも失礼な決め方で研究室を決めたのですが、「あみだくじ」を 5 回繰り返したらすべて春本 先生にたどり着くという運命的な結果となり、これを切っ掛けに春本研究室の門を叩きました。当時の研究室では先輩方が織毛虫の攻撃と防御に関する研究を中心に進めておられたのですが、そこで春本 先生から織毛虫の有性生殖（接合）に関する研究を始めたいと思っていることを聞かされました。織毛虫は環境の変化に応じてフェロモンのようなシグナル分子（接合誘導物質）を合成、分泌し、それによって同種の接合相手を活性化させ接合を開始させるという制御機構をもっていること、そして織毛虫の中で初めて接合誘導物質が同定されたのはブレファリズムであるが、そのうちのひとつ（I 型細胞が分泌するガモン 1）が最初に発見されてから 20 年以上もの間、実態が未解明のままであることを知り、是非とも「ブレファリズムのガモン 1 の実態解明」を自らの卒業研究のテーマにしたいと思いました。非常に不安定な活性をもつガモン 1 を、その接合誘導活性を頼りに精製するというのが最初にクリアしなくてはならない最大の課題でした。当時の研究室にはタンパク質研究の設備も経験もなかったので、学部 4 回生のときに筑波大学の沼田 治 先生の研究室を訪問させていただきカラムワークや SDS-PAGE、銀染色などのタンパク質精製に必須の技術を教えてくださいました。その後も当時研究室にはなかった技術を他大学の先生方にご指導いただきながら試行錯誤を繰り返すうちに、何と

してもこの課題を成し遂げたいという思いが強くなり、当初は予定していなかった大学院へ進学して研究にのめり込み、4 年間の試行錯誤を経てようやくガモン 1 の分子構造を解明するに至りました。このときの経験が私の研究人生を支えており、苦しい時期を乗り越える糧となっています。原生物の分野を離れた時期もありましたが、現在は母校の学生達と共に、ガモン 1 の構造決定後に見えてきた新たな課題や、ブレファリズムの接合にみられる独創的な現象の仕組みを解き明かすために日々研究に取り組めることを幸せに感じます。最後になりましたが、これまでにご指導ご支援を賜りました多くの先生方に心より感謝申し上げます。今回の受賞を励みに、今後も原生物学の発展に少しでも貢献できるよう、より一層精進してまいりますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



受賞者近影

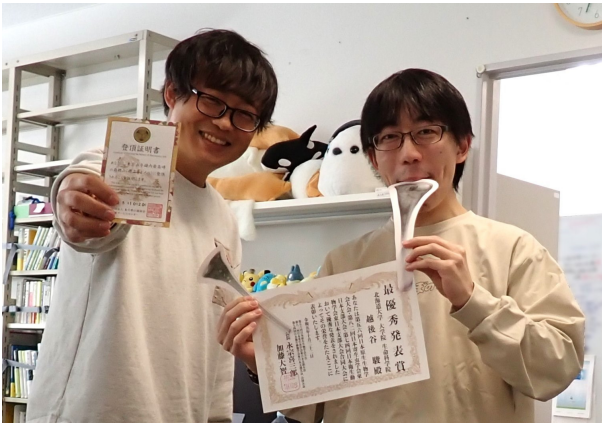
## 2023年度 BPA賞 受賞者コメント

細胞周囲の幾何形状に応じた繊毛虫ラッパムシの固着場所選択行動

越後谷 駿 (北海道大学)

原生物という存在を知ったのは学部4年生の頃、通りがかりに生物学科の卒研ポスター発表を聞き、鞭毛打制御のちょっとした工夫で非自明な走光性を示すクラミドモナス (*Chlamydomonas*) という単細胞生物を知りました。当時はゾウリムシ (*Paramecium*) = 点くらいの認識しか持っていない物理学徒でしたが、単細胞生物に備わる行動アルゴリズムの工夫と力学的なカップリングで洗練された生存システムにせまる研究に「やってみたいことはここかも」と感じ、原生物の世界に入ってきました。「青い遊泳微生物」のリアルに感激し、採取・培養失敗を2年ほど繰り返す、いろんな方に励まされ助けられ今日に至ります。本研究に様々な側面から携わっていただいた皆様、ご選考いただいた方々に感謝いたします。

正直 BPA をいただけるとは思っていませんでした。この研究が面白くなるのはこっから、自身の原生物研究もこっから、めちゃくちゃ面白いネタがたくさんあるのでガンガン研究を進めていきます。原生物の世界っていいですね、精進します！



ソライロラッパムシのステッカーをくわえる受賞者(右)と北海道大学 西上 幸範 会員 (左)

繊毛虫テトラヒメナの配偶核形成に関わるヌクレオポリンの探索

掛川 陽平 (日本大学)

この度はこのような名誉ある賞を賜り、身に余る光栄でございます。学部4年生の私にとって初めての学会発表であったことに加えて、発表者の大部分が大学院生やプロの研究者ということで、とても緊張した中での発表でした。口頭発表の機会を頂けただけでも貴重な経験となりましたが、研究内容を多くの方々に評価していただき、BPAを受賞できたことは、私の大学生活の中で最も誇れるものになりました。

私は来年度からは社会人となり、研究の世界から離れることとなりますが、今回の経験を活かして社会人としても精一杯努力して参る所存です。

最後になりましたが、実験から発表に至る一連のプロセスを丁寧にご指導いただきました日本大学文理学部生命科学科の岩本 政明 教授と明松 隆彦 助教に心より感謝申し上げます。



受賞者近影

## 月井雄二記念国際交流基金から支援を受けた若手研究者の学会参加報告

IX European Congress of Protistology (ECOP) 参加報告  
島田 雄斗 (自然科学研究機構)

私にとって今回の IX European Congress of Protistology (ECOP) への参加はとて有意義な経験となりました。私は現地開催の国際学会に参加するのは初めてでした。まず会場に到着し、初めて国際学会の雰囲気に触れた時は、言葉では言い表せない感動がありました。とても賑わっており、活気を肌で感じました。発表では、海外の研究者の方々はとても楽しく発表を行い、研究に情熱を持っていることが伝わってきました。私自身も聞いていると楽しくなり、もっと研究がしたいという気持ちが高まってきました。同じ研究対象である コルポーダ (*Colpoda*) の話が出た時はとても嬉しく感じました。

私のポスター発表では多くの方が聞きに来てくれました。コルポーダについて興味がある方、休眠シストに興味がある方、フェロモンに興味がある方など様々な人がいました。みなさん興味を持って発表を聞いてくれて、たくさんの質問をしてくれました。私の発表した内容は、コルポーダが放出するシスト化誘導フェロモンの発見とその特性です。ある方に、「そのフェロモンは、他の生物のシスト化は誘導しないの?」「他の生物への効果を試すのも面白い」と言われました。シスト化する他の生物にシスト化誘導フェロモンを加えたことはなく、とても有意義な質問、提案であると感じました。また、別の方には、フェロモン作用の評価方法が良いと言われました。シスト化誘導フェロモンの作用はコルポーダのシスト化の有無によって容易に評価することができます。これにより、自身の研究が、フェロモン作用を評価する点で優れていることに気づきました。さらに私は、クロマトグラフィーによってシスト化誘導フェロモンを精製して解析する方法を知りました。現在、シスト化誘導フェロモンの特定には至っていません。この助言は、今後の研究に大いに役立つと感じました。このように、自身の研究の優れている点を知り、様々な方から助言をいただき、今後の研究活動により一層励んでいこうと改めて思いました。しかし、発表では自身の英語力の未熟さについても痛感しました。興味を持って質問してくれども、英語で上手く答えることができないことがありました。英語力がないばかりに上手く議論できない歯痒さを感じていました。英語力の向上はこれからの課題です。

今回の国際学会では、現地での参加の楽しさをとても実感しました。海外の研究について知ることができ、実際に自分の研究を海外の方々に伝え、議論することができる。そして、これからの研究活動を頑張る良い刺激にもなる。私は、これからも研究活動に励み、良い成果を上げると共に、英語力も身に付け、また国際学会に参加したいと思いました。

IX European Congress of Protistology (ECOP) 参加報告  
千原 あかね (自然科学研究機構)

2023年7月10日～7月14日にオーストリア、ウィーンで開催されたヨーロッパ原生生物学会議 (ECOP) に参加させていただきました。コロナ禍により国際学会に全く参加できなかったため本当に久しぶりの海外渡航となりました。

さて、今回の ECOP では博士課程での研究内容であった『巨大ウイルス感染時のアカントアメーバの集群化』について発表しました。巨大ウイルスは、近年世界中で発見されている新たなウイルスです。特に原生生物に感染するものが多いため、原生生物とは切っても切れない関係にあると私は考えています。巨大ウイルスの驚くほどの大きさや形態・ゲノムの多様性に多くの研究者たちが注目おり、今回の ECOP でもたびたび「巨大ウイルス」という言葉を耳にしました。

私の発表内容は、アカントアメーバを宿主とする巨大ウイルスが感染した際に、アカントアメーバ細胞が集合し大きな塊を形成する現象 (バンチ化) に着目し、SBF-SEM を用いてバンチ化したアカントアメーバ細胞群を3次元的に可視化することで宿主であるアカントアメーバとウイルス粒子の関係を明らかにしたということを中心に議論するというものでした。ポスターセッションでは、多くの方が興味を持って聞いてくださり、宿主側のアカントアメーバ視点でのコメントや今後行うべき実験についての提案をいただき、新たな気づきをたくさん得ることができました。私が行った SBF-SEM を用いた3次元再構築についても興味をもって質問して下さる方がたくさんいて嬉しかったです。

また、口頭発表を聞いて感じたのは、シングルセルトランスクリプトーム解析など分子生物学の新たな技術を用いた研究が多かったことです。私の研究は形態観察や構造解析が主な手法ですが、分子生物学的な実験手法を取り入れるなどして、多角的な視点で自身の研究を展開していくことの必要性を感じました。

最後になりましたが、本学会の参加費は日本原生生物学会を通して、月井雄二記念国際会議参加促進支援金より助成していただきました。この場を借りて、月井先生、ならびに、ご遺族の皆様にご心より感謝を申し上げます。今回、支援金をいただき ECOP に参加したことで、世界における研究のトレンドを十分に理解することができました。この経験を無駄にすることなく、自身の今後の研究をより発展させるべく精進します。



The 2023 British Society for Parasitology Spring Meeting  
参加報告

梁瀬 隆二 (Oxford Brookes University)

この度、月井雄二国際会議参加促進支援金のご支援を受け、2023年4月11日から14日まで英国エディンバラで開催された国際会議「The 2023 British Society for Parasitology Spring Meeting」に参加しました。会議の会場には、エディンバラ大学の McEwan Hall と呼ばれる古代ギリシャの劇場に基づいて建設されたとても美しいホールが使用されました。会議には世界中から多くの寄生虫学者が参加し、4日間で100以上の口頭発表と、200以上のポスター発表が行われました。

私は「Functional dissection of the *Leishmania* - sand fly attachment interface」という演題で口頭発表を行いました。この発表で私は、リーシュマニアの媒介昆虫体内への接着構造を三次元電子顕微鏡観察法により詳細に明らかにするとともに、比較プロテオミクス解析により、その接着に関わるタンパク質を世界で初めて明らかにし、これまで謎に包まれてきたキネトプラスト類原虫の接着機構の解明を行ったという研究内容を紹介しました。この研究は、2020年8月から2年半にわたって英国の

オックスフォードブルックス大学で日本学術振興会の海外特別研究員として行ったもので、今回の発表はこれまでの研究成果を総括する内容となりました。新型コロナウイルスの影響で、海外の研究者との研究交流の機会の多くが制限されていたため、今回の対面での国際会議参加は非常に貴重な機会となりました。

また、私はまだ寄生虫学の分野に関わるようになって日が浅いこともあり、他の寄生虫学者との繋がりを作れずにいましたが、この国際会議参加を通じて、Prof. Alvaro Acosta Serrano (University of Notre Dame) など世界中の著名な寄生虫学者との繋がりを作ることができました。さらには自身の研究について多くのフィードバック（それぞれの接着タンパク質の具体的な機能は何であるのか、接着形態は寄生虫の伝染に如何に関わっているのか、等）を得ることができたとともに、今後の研究についての新たなアイデアを得ることもできました。

この度の国際会議への参加を可能にいただきました。月井雄二国際会議参加促進支援金のご支援、そして故月井雄二博士とそのご遺族、また日本原生生物学会の事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。

## 若手の会 通信

### 新役員挨拶

石浦 卓也 (北海道大学)

単細胞生物は一つの細胞だけで成り立っています。人間が 37 兆個もの細胞からできていることを考えると、彼らは人間より単純な行動しかできないと思ってしまいます。しかし、単純な、彼らは約 10 億年以上前から地球上に生息しており、気候変動を乗り越えて現在まで種を残し続けている先輩です。脳など神経系が存在しなかった一つの細胞で、常に変化し続ける環境に適応する彼らは本当に単純な生き物なののでしょうか？

私が研究対象にしている粘菌 *Physarum polycephalum* (モジホコリ) はアメーバの仲間、黄色いマヨネーズのような見た目をしています。大きさは、数ミリ~数メートルと幅広いです。彼らは核が複数ある多核単細胞生物で、細胞が切り刻まれても、核が残っていれば、そこから再度成長することが可能です。また、成長したもの同士再度融合することも可能です。

現在私は、粘菌の水に対する応答について研究しています。これまで粘菌は培養しやすい寒天ゲル上での行動が着目されており (図 1), 野生での粘菌変形体での行動は詳しく調べられていませんでした。私は、湿潤な環境にいる粘菌は水に晒される機会が多くあると予想し、粘菌の環境中に水を入れて新たな環境構築を行い (図 2) どのような応答があるかを調べています。

若手の会では、これまで、勉強会などに楽しく参加させていただいておりました。これからは会計として若手の会を盛り上げ、原生生物に多くの方が興味を持っていただけるように活動を頑張っていきたいと思います。

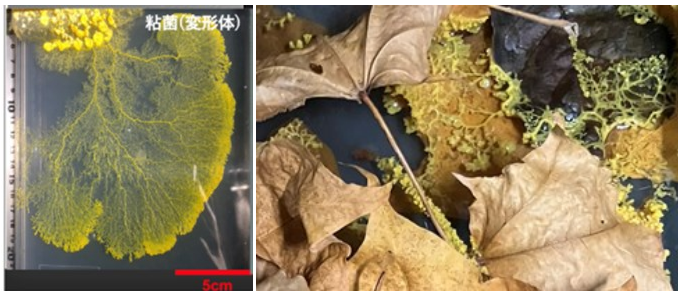


図 1. 寒天培養中の粘菌変形体 (左)

図 2. 野生を模した環境中の粘菌変形体 (右)

福田 直也 (島根大学)

このたび原生生物若手の会に参加させていただきました。島根大学学部 4 回生の福田 直也です。現在、水凍結乾燥法における試料凍結条件について研究しています。水凍結乾燥法は、走査型電子顕微鏡 (SEM) 用試料手法の一つで、瞬間的な凍結とその後の氷の昇華によって顕著なアーティファクトを大幅に少なく試料を作製することが可能になる方法です。化学薬品による試料へのダメージがなく、細胞運動中の瞬間的な形態を観察できるという特徴があります。現行の水凍結乾燥法でもかなり綺麗な SEM 像を撮ることができますが、もっと綺麗な SEM 像を撮るために試料凍結条件を試行錯誤しています。実体顕微鏡や光学顕微鏡では見ることはできない

スピロストマム (*Spirostomum* sp.) やゾウリムシ (*Paramecium caudatum*) の細胞表面の繊毛列などを観察することができて面白いです。

若手の会の役員としては力不足ですが、会長や先任役員みなさんと楽しく原生生物について学び、面白い企画を立案できるよう精一杯取り組んでいきます。よろしくお願いいたします。

### 活動報告

島田 雄斗 (自然科学研究機構)

3 学会合同大会 (PPEZ-2023) の初日 (10 月 20 日) に若手の会では発表会・観察会を実施しました。3 学会合同大会内でのイベントでしたので、様々な研究分野の方に足を運んでいただきました。イベントの前半では若手研究者による研究発表を行い (図 3), 発表の最初では、それぞれが自己紹介をしました。ユニークな自己紹介もあり会場からは笑い声が聞こえる場面もありました。研究の内容になると、皆さん興味を持って発表を聞いてくださり、質疑応答の時間には多くの質問ができました。発表者にとっても、聞き手にとっても有意義な時間になったと思います。



図 3. 発表会の様子 (左: 自己紹介, 右: 会場の様子)

また、イベントの後半では観察会・交流会を行い (図 4), 10 種類以上の生物 (e.g. *Amoeba proteus*, *Blepharisma stoltei*, *Euglena gracilis*) を展示しました。参加者からは、「この生物は初めて見た」「生で見るとは初めてで、面白い」「動いている生物を見るのは楽しい」などの嬉しい言葉を多くいただきました。また、異なる分野の方と研究について議論している様子も見え、交流会としても成功したと思います。今回、様々な分野の方々に原生生物の魅力を伝え、研究について楽しく議論することができました。またこのような機会を作ることができればと思います。



図 4. 展示の様子 (左), 観察中の学生の様子 (右)

### コラム：3学会合同大会についての感想

山本 桃花 (奈良女子大学)

学会で発表したのは初めてで、とても貴重な経験をしたなど、学会発表が終わってからも数日は余韻に浸っていました。学部4回生のときの研究室メンバーと指導教員に卒業ぶりに会えて、直接研究の報告ができたこと、オンラインでしか話したことのなかった若手の会メンバーと、研究や原生物、その他のことについてもお話できたこと、名のある先生方と交流できたことなどなど、全てが新鮮でとても楽しかったです。研究のことも発表の仕方学ぶことが多く、今後の参考にしたいです。学会が終わってからは、家族に写真を見せたりどんな発表をしたのかを聞いてもらいました。祖父母には研究内容のことはあまり伝わりませんでした。それでも「研究してるの楽しそうだね」と言ってもらえたので少しは成長した姿を見せられたのではないかなと思います。引き続き、研究生活がんばりたいです！

### 若手の会役員募集中

若手の会では新しいメンバーを募集しています。原生物を研究する若手同士で研究について楽しく議論しませんか。若手の会では、発表会や交流会などを企画しています。発表会では様々な研究や生物を知ることができます。交流会では、原生物を研究する仲間を作ることができます。興味がある方はぜひ島田 ([yshimada@nips.ac.jp](mailto:yshimada@nips.ac.jp)) までご連絡ください。

### 発表会を開催

若手の会では来年の春(2024年3月9日)に若手同士による研究発表会をオンラインで開催します。全国の若手研究者の研究を知る良い機会です。また、自身の研究内容についても発表し、様々な意見を聞き、研究活動に役立てることもできます。さらに、発表練習の良い機会にもなります。参加を希望される方は下記の応募フォームからご応募ください。ご参加を心よりお待ちしております。

日時: 2024年3月9日

場所: オンライン

応募フォーム: <https://forms.gle/eBGZ4N29J9gN79Mx9>

### ■若手の会役員 (2023年12月24日現在)

会長: 島田 雄斗 (自然科学研究機構)  
 副会長: 島田 真帆 (島根大学)  
 会計: 石浦 卓也 (北海道大学)  
 役員: 越後谷 駿 (北海道大学)  
 面田 彩馨 (神戸大学)  
 山本 桃花 (奈良女子大学)  
 福田 直也 (島根大学)

## 事務局からのお知らせ

庶務 福田 康弘 (東北大学) ・ 庶務補佐 杉浦 真由美 (奈良女子大学)

平素より日本原生生物学会の活動に多大なるご理解とご協力を賜り、篤く御礼を申し上げます。2022年に実施された第55回日本原生生物学会大会の総会において、本会が事務年度、会計年度、会長・評議員・監事の任期について異なる期間を設けており、運営にかかわる作業が煩雑になっている等の問題をご報告し、学会の活動に適した案を園部会長のもと事務局内で検討することをご報告しておりました。このことについて事務局内で十分に検討し、本会の事業年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わるものと定め、本会運営にかかわることはこの期間に執り行うこととして、事務年度ならびに会計年度の変更にかかわる会則の改定を過日の第56回日本原生生物学会大会における評議員会ならびに総会において提案し、承認をいただきましたのでお知らせします。この事業年度への統一にあたって、次期の会長および評議員の任期のみ約2年半(2024年大会の翌日から2027年3月31日まで)となることも承認されましたので、こちらをあわせてお知らせいたします。

今後、承認された4月1日に始まり翌年3月31日に終わる事業年度への移行は、次のように進めてまいります。

## 第一段階

本年度の事務年度ならびに会計年度の末日を繰り下げ、2024年3月31日としました。この繰り下げのため、皆様が有する本年度の会員資格の末日は2024年3月31日です。また準会員を対象にする原生生物分譲サービスの無償株数は、会員期間の延長にともなって今期のみ2株分を追加いたします(計6株まで無償となります)。次年度(2024年度)の年会費は2024年1—2月ごろに請求いたします。

## 第二段階

2024年に実施される選挙で選出される次期会長ならびに次期評議員は、その任期を約半年短縮し、終わりを2027年3月31日とします(約2年半:2024年大会の翌日から2027年3月31日まで)。これ以降(2027年4月1日以後)は3年間の任期へ戻ります。なお選挙はこれまでと同様に夏頃に実施し、秋に開催される年大会内の総会において新たな会長ならびに評議員を報告するようにいたします。

これらの変更にあたって会則の第5条と第6条、ならびに本文末にあげた細則および関連する申し合わせ事項が改訂されました。また新たな時限付き細則が変更に関わる作業を明確にするために設けられましたこともお知らせいたします。

## 改訂された会則の項

- ・第5条ならびに第6条

## 改訂された細則

- ・一般会計に関する細則
- ・庶務関係細則

## 新たに設けられた細則

- ・日本原生生物学会 事業年度の変更に関わる細則

ご質問やご不明な点は学会事務局までお問い合わせください。

## 編集委員会からのお知らせ

「原生生物」編集委員長・矢吹 彬憲 (海洋研究開発機構)

2023年も早いもので、年の瀬を迎えつつあります。異常気象や国際紛争など不安や悲しい出来事も多かった一方で、コロナ禍にあったさまざまな制限の緩和や対話型AIの台頭など新しく明るい未来の到来を予感させるものもあったと個人的には感じております。2024年も、会員の皆さまにとって実りある良い年になることを願っております。年末年始にかけて大変お忙しく過ごされることと推察しますが、ふとした時間の息抜きに原生生物6号2巻を手にとっていただければ幸いです。

次号、2024年6月発刊予定の和文誌「原生生物」第7巻第1号に掲載する原稿の締め切りは、4月下旬を予定しております。それに向けて、ぜひ原稿をご準備いただければ幸いです。

和文誌「原生生物」投稿規定は[こちら](#)

## 和文誌編集委員

原生生物編集委員長

矢吹 彬憲 (海洋研究開発機構)

柴田 あいか (Arizona State University)

内之宮 光紀 (電力中央研究所)

## 編集委員長

石田 正樹 (奈良教育大学)

会費等振り込み先

郵便振替口座

郵便振替口座番号：01300-6-103583

加入者名：日本原生生物学会

銀行振り込み口座

ゆうちょ銀行（金融機関コード：9900）

店番：139 カナ店名：イチサンキュウテン（139店）

当座貯金 口座番号：0103583

受取人カナ氏名：ニホンケッ セイセイブ ツカ ツカイ

---

原生生物 (GENSEI-SEIBUTSU) 第6巻 第2号

2023年12月24日 発行

編集兼発行者 : 日本原生生物学会

発行所 : 日本原生生物学会

事務局 : 庶務担当 福田 康弘, 杉浦 真由美

E-mail: [gajsp@protistology.jp](mailto:gajsp@protistology.jp)

編集局 : 〒237-0061 神奈川県横須賀市夏島町 2-15

海洋研究開発機構 生態研究棟内

「原生生物」編集長：矢吹 彬憲

Tel/Fax: 046-867-9498/046-867-9525

E-mail: [yabukia@jamstec.go.jp](mailto:yabukia@jamstec.go.jp)

---